

彦根藩における国学の受容と変化

はじめに

賀茂真淵と本居宣長の国学がどのように受容され展開されていったかについては、これまでも数々の研究がなされてきた。宣長の国学に関していえば、岸野俊彦氏は尾張藩内で鈴門の国学がどのように批判され、また受容されていたかを明らかにし^①、西岡和彦氏は出雲大社において宣長の国学が垂加神道と相克しつつ、並立していた事実を検証した^②。ほかに、中村一基氏は各地の藩校における鈴門の門人達のつながりとはたらきについてまとめている^③。

これらは、限られた資料を駆使しながら宣長の門人達の

活動をあとづけ、その思想的な意味を明らかにした労作であるが、残された問題も多い。これまでの研究では、主に宣長の古道論や天皇観を中心として受容の問題が論じられてきた。国学が古道論を柱とし天皇がその核心に位置していることはもちろんであるが、国学の浸透について考察する場合、より幅広く多様な視点から考察していくことが必要であろう。

たとえば、宣長は古の道を知るために欠かせぬ階梯として詠歌を位置づけている。歌の学びは門人達の重要なつとめであった。遠方にある門人達と宣長の接触は、文通か、宣長の出張講義、あるいは門人達が松坂にやってきて直接講義を受けるという三つの形があったが、文通は歌の添削

大久保 紀子

が主であった。各地の鈴屋社中からたぐさんの詠草が宣長のもとに送られ、宣長はいつもその添削に追われていた。⁴出張講義や松坂での講義には歌集の講義が常に含まれており、歌会も必ず開かれて、詠歌は国学を志す者にとつて欠かすことのできない課目であった。

国学の受容と展開といえば天皇論や神国思想、あるいは幕末の政治的な運動と結びつけられ、その中でのみ論じられがちであるが、実際に宣長と門人達のつながりを見てみるとそうした思想的な問題がとりあげられることは少なく、歌を介した結びつきが強いことに気づく。たとえば、門人の歌集に寄せた宣長の序のいかに多いことか、また、宣長亡き後、各地で門人達が詠んだ鎮魂歌のおびただしさ。⁵ 国学の受容という問題について考察する場合、詠歌は非常に有効な視点の一つなのである。

序 章

一

本稿では右のような問題意識の上にたつて、彦根藩における詠歌の問題を通して国学がどのようなたらしめをなしたのか、どのように変化していったかを考察する。近世中期以降の彦根では他に類を見ないたぐさんの撰歌集が編纂され、詠

歌に関してきわだった特色を見せている。彦根藩第十一代藩主直中（寛政元年（一七八九年）—文化九年（一八二二年）在位）はみずからも歌をよくし、藩校稽古館を創設して和学方を⁶おいた。全国の藩校の中でも最初から和学方を⁷おいたのは珍しく、しかも初代和学方をつとめたのが宣長の門人小原君雄と村田泰足であった。

十八世紀前半享保年間から十九世紀前半天保年間の頃までに彦根藩で編まれた撰歌集のうち、よく知られているのは『彦陽和歌集』、『彦根歌集』、『彦根夫梨』、『⁸凝烟舎詠草』などである。⁹ このうち『彦陽和歌集』、『彦根夫梨』には、藩士のみならず浪士、町人、近隣の村人の歌までおさめられており、¹⁰ 詠歌の層の厚さを感じさせる。『彦根歌集』は藩主直中の命によつて小原君雄が編纂したものである。また、同じく鈴門で小原とともに初代和学方を勤めた村田泰足の歌集『凝烟舎詠草』が藩校版で出版されていることも特筆すべきであろう。¹¹

歌会もさかんに開かれ、藩主直中が毎年催した仲秋観月の歌会、文化元年（一八〇四年）城下百人の歌人を集めて開かれた歌合わせなどの記録がある。¹²

このように彦根藩で歌がさかんに詠まれた背景としては、京都に近いという地理的な位置、経済的な豊かさ、代々の藩主が文武両道をとえ武術とともに文芸をさかんに奨励

したことなどが一般的に考えられるが、具体的に強力な牽引力を発揮したのは県居門の歌人達であった。賀茂真淵派の大菅中養父（宝永七年（一七一〇年）—安永七年（一七七八年））、僧海量（享保十八年（一七三三年）—文化十四年（一八一七年））などが培った下地を鈴門の小原君雄（宝暦二年（一七五二年）—天保六年（一八三五年））、村田泰足（寛延二年（一七四九年）—文政六年（一八三三年））が受け継ぎ、育んでいった。そしてその流れが幕末、井伊直弼のもとできわめて重要な役割を果たした国学者長野義言（文化十一年（一八一四年）—文久二年（一八六二年））にまでつながっていくのである。

二

彦根藩における国学についてはすでにいくつかの研究がある。古くは田中千和氏が彦根における県居門、鈴門の国学について、また長野義言の思想について概観し¹²⁾、また、南啓治氏は藩校稽古館の成立と発展に沿って彦根藩の国学の流れをたどっている¹³⁾。

しかし、両者ともに彦根における国学の受容が人のつながりや藩校の変遷を通じて概観されるにとどまり、その底に流れている国学の思想的な内容や変化を読み取り意味づけるまでに至っていないことが惜しまれる。

彦根歌壇の人々の歌はもっぱら風雅を旨とした月並な歌

で、個々の歌に思想を読みとることはできない。しかし、歌集の序や藩校に関する文書などをみていくと、詠歌の意味が県居門から鈴門へ、さらに長野義言の時代へと進むにしたがってはつきりと変化していることがわかる。その変化の意味を考察することによって、彦根藩における国学の受容と変化の様相を明かにすることが本稿の課題である。

第一章 賀茂真淵派における歌の意味

『彦陽和歌集』が編まれた享保十三年（一七二八年）から、寛政五年（一七九三年）の宣長の彦根来訪後しだいに鈴門の後世風の歌が主流となるまでの間、彦根歌壇を担っていたのは賀茂真淵派の歌人達であった。彼らにとつて詠歌とは、あくまでも国を治めるための一手段であった。

この頃の彦根の歌人達には和漢両学を修めた者が多く、しかもその漢学はほとんどが徂徠学である¹⁴⁾。彦根藩の文芸の祖ともいふべき龍草廬（正徳四年（一七一四年）—寛政四年（一七九二年））は徂徠・太宰春台を師とし、また国学にも通じていた。また、彦根における賀茂真淵派歌人の代表的な存在である大菅中養父は賀茂真淵に私淑する一方、徂徠学をも学び、和漢両学にわたって藩士子弟の教育にあたった。

彦根藩の藩学は徂徠学であったが¹⁵⁾、その担い手達がまた

賀茂真淵派の歌人でもあった。ごく大まかにいえば徂徠学と国学は、古典の言葉そのものの研究を基礎としている点において、また詩文や詠歌を非常に重くみるという姿勢において共通している。また、後述するように賀茂真淵の思想には若い頃学んだ儒学の名残があった。詠歌は治国の手段であるという考え方は、徂徠学の政治重視の考え方と県居門の詠歌を重んずる姿勢を重ね合わせたものと考えることが出来る。

大菅中養父は徂徠学派らしく「国詩（歌）も又王道の一端也」ととらえて次のようにいう。

蓋天下の政は何の為とか思へる、兆民を安せんか為にあらずや、その兆民はいかにすれば安するとか思へる、其情を得れば安するにあらずや、（中略）然るに天下の政を執る人は、必高位に居たまへは、兆民の情安するや否や、いかにしてか知しめす事をえんや、故に先王諸国の詩を徴て人情を監玉ふ也、治世の音はたのしみ、乱世の音は怨めり、是に於て得失を正し、風俗を移したまふ、先王の治術至れるかな。（大菅中養父『国歌八論斥非』、『本居宣長全集』第二巻、筑摩書房、一九八九年、四九五頁）

天下の政治を預かる者が民を安んずるためには、民の情によく通じていなければならない。詩（歌）はそのための

非常に有効な手段であり、歌によって民の情を知り、その情を教化し良俗を広めることができる。これが大菅中養父が考える歌の第一義的な意味であった。歌は「教化を美し風俗を移すの具」なのである。

県居門で藩校稽古館創設に功あった歌人海量も「人をなつけ国をおさめんまなびはいにしへのうたにてぞあなる」として歌が政治に果たす役割を重視している。

歌は政教の具であるという儒教的な考え方は国学とは相容れないように思われるが、中養父や海量が師と仰いだ賀茂真淵の歌論にすでにみられるところであった。真淵は歌が人の心を表現するものであるとしながらも、それが政治の上で役立つことを認めて次のように述べている。

もとよりも歌は、人のこゝろをのぶるものにて、それにつけて、いとやむことなきあたりに、をす国人のこゝろをもしらすものなれば、（『歌意考』、平・阿部校注『近世神道論・前期国学』岩波書店、一九七二年、三五四頁）

歌は、人の心をいふものにて、いはでも有べく、世のために用なきに似たれど、是をよくしるときは、治りみだれんよしをも、おのづから知べきなり、（『国意考』、同右、三七七頁）

歌は人の心を表現するものであるから、それによって人の心をよく知れば治世の指針を得ることができると真淵は

いう。大管中養父も海量もこの真淵の考え方を受け継いでいる。

歌が政治的な用を果たすといっても、宋儒が厳しく勸善懲惡の意図をもって詩歌を政治に用いたのとは異なる。あくまでも歌の人の情をよくあらわすという性質、歌の「真心よりいで、うらうへなく、心直にことはのゆたけかれは」こそ人の心をなごませようこぼせるという性質によって、歌は「おのづから国ををさむるをしへともなれる」のである。

真心をことばゆたかに表現した歌によって人心を知り、理屈によってではなく歌によって自然に人心の教化をはかる。そうした統治のしかたこそ「天地に合ひて、御代を治めませし、古への神皇の道」なのである。賀茂真淵派の歌人達は人の心をよく伝える歌をもって「大らかにゆたけき天地の心」にかなう統治が実現されることを理想としていた。

文芸をこよなく愛した英君十一代藩主直中が藩校に和学方を置いたのも「文」を治国の用とするためであった。直中が稽古館創設にあたって定めた掟の冒頭に「文」についての規定がある。

一文を学ぶの肝要は孝悌忠信の道を基として治国安民の旨に通達し国用に可立様可相励事（文部省編『日本教

育史資料卷三』臨川書店、一九六九年、三八九頁）

直中の時代は撰歌集がたくさん編まれ、歌会もさかんに開かれた。先にも述べたように直中主催の仲秋観月の歌会が開かれるのは毎年のことであつたし、家老が城下の歌人百人を集めて歌合わせを行った記録もある。これらは風雅を楽しむばかりではなく治国安民を念頭において行われたのである。

第二章 鈴門への移行

鈴門の国学が彦根藩に受け入れられるようになった直接の契機については明らかではない。しかし、賀茂真淵派から鈴門への移行の差し渡し役として海量が重要な役割を果たしたことは否定できないであろう。海量は、早く天明五年（二七八五年）、松坂を訪れて宣長と親交を深めている。県居門の歌人としておおらかな古風の歌を詠む海量と、古風にとられず技巧的な歌を認める宣長との間には相容れない部分もあったが、海量は若い彦根藩士松井安国に鈴屋入門を勧めたといわれている。

彦根藩には松井安国をはじめとして小原君雄、村田泰足、三浦元苗など十名の鈴屋門人がある。⁽²⁶⁾ 十名という数は他の藩と比較して必ずしも多いとはいえないが、藩校稽古館の

初代和学方として鈴門の小原君雄、村田泰足が任命されていること、藩命によって編纂された『彦根歌集』の序を宣長に依頼していることなどから、彦根藩が鈴門を力と頼んでいたことが知られるのである。

県居門から鈴門への移行に際しては大きな問題が二点あった。第一に県居門の人々が歌の政教の具としてのほたらしを認めるのに対して、鈴門では歌はただ心情を表現するものであるということに固執し、歌を政治的目的に従属させることを堅く拒否していた。

第二の問題は県居門では万葉ぶりの古風の詠歌だけが認められていたのに対して、鈴門では古風と後世風を共存させ詠みわけていたということである。いずれも詠歌の問題であるが、実は真淵の国学と宣長の国学の質的な相違が反映されている。

一

第一の詠歌の意味づけの問題についての鈴門の答えは明快である。歌は心に思うことを表現するためのものであって、二義的な目的を想定してはならない。「歌ノ本体、政治ヲタスクルタメニモアラズ、身ヲオサムル為ニモアラズ、タ、心ニ思フ事ライフヨリ外ナシ」という宣長の言葉ぶりである。

彦根藩における鈴門の中心的存在であった小原君雄と村田泰足は、皮肉にも和学方として政教の用としての歌のはたらきを実践し推進していく立場にあった。しかし、たとえば藩校版で刊行された村田泰足の『凝烟舎詠草』に寄せた小原君雄の序では歌の政治的な役割については一言も言及されていない。藩の和学方が藩校で出版した歌集について記した序である。歌を治国安民のための手段と考えるならば、当然その旨が記されるべきであろう。しかし『凝烟舎詠草』の序で焦点となっているのは歌の古風と後世風の問題であり、讃えられているのは村田泰足の詠歌に対する真摯な姿勢なのである（後出）。小原君雄の序では治国に役立つものとして歌をとらえる視点が欠落し、古風か後世風かという歌の表現形式が焦点となっている。

小原君雄にとって詠歌とは政治のための手段ではなく、師宣長の教えのとおり思いをあやな言葉に託してのべるものであった。後年（文政八年（一八二五年））小原は和学方として藩校改革の意見を問われて、和学は藩校で公の科目として教えるよりもむしろ私塾で教えたほうがよからうと述べている。小原君雄の考える和学は藩という公の政治機構とは本質的になじまないものだったからである。小原君雄にとって和学とは漢学と対置されるような学問ではなく、より基本的な誰でもが当然のこととして学び、身につける

べき素養であつた。詠歌を例にとつていえば、政治に役立てるために歌を詠むのではなかつた。思いを雅な言葉に託してのべることは誰に強制されるともなく、誰もがおのずからなすべき行爲だったのである。

小原君雄は改革のための意見書の中で次のように述べている。

和学之儀ハ皇国之大道ニテ、何学仕候者迎モ不存候テ不叶道ニ御座候ヘハ、別段ニ和学寮迎師範有之学館ニテ教授仕候儀ハ承リ及ハス（中略）是非此学張行仕候ハンニハ、芸州学寮之振合ニ御座候テハ不被行事ト存候。（文部省編『日本教育史資料卷十二』臨川書店、一九七〇年、五〇三頁―五〇四頁。便宜上、句読点を加えた。）

和学は「皇国之大道」で、どのような学問を修める者でも必ず学ばなければならない学問であるから、この教授を藩校の和学方に限る必要はない。むしろ、和学の隆盛を願うならば芸州の例に倣うべきであると小原君雄はいふ。

稽古館では和学方が冷遇されていたし、また、小原君雄が改革の意見書の中で引用している肥後の例にみられるような和学と漢学の間の軋轢もあつたであらう。そうした問題はすべて和学のとらえ方が誤つているからだというのが小原君雄の考えである。和学とは漢学と同じレベルにあるものではない。より基本的な、誰でもが当然身につけるべ

き素養なのである。それが芸州でいかに実践されていたか、小原君雄は次のように続けている。

芸州ニ和学者多ク、家士六百石ヨリ以下之人々又町人百姓神職之族、段々国学（藩が管轄する公の学問という意味―筆者注）同様ニ和学寮相立申度旨安芸侯へ願候ヘトモ、志願不相叶候ニ付各申談シ、其中之町家之富人自分之借家ヲ潰シ申候テ私ニ和学問所建立仕候ニ付、和学達者之人々代ル代ル弟子ヲ聚メ申候テ教導仕候処、大ニ被行候テ他国之志有之者モ滞留稽古等仕、騒々數相聞エ申候、依之候ヨリモ難被捨置、町奉行一人ツ、代ル代ル出席見届申候様ノ定ニ相成、日々繁榮雅事ニテ不作法モ無之、終ニ芸藩ニ公子御出席弥以学徒多集仕相統仕候故ニ、後々ハ侯ヨリ普請作事モ被仰付国学同様ニ相成申候、一盛事ニテ珍敷事ニ御座候。（同前、五〇四頁）

和学を志す「家士」、「町人百姓神職」の人々が私設の塾につどつて学び、それが他国の同じ志をもつ人々にまで広まって、ついには藩の認めるところとなるまでの様子が目に浮かぶように描写されている。小原君雄が理想としていたのは藩や政治といった機構から離れた和学の学びであつた。

小原君雄の提案が実現されたかどうか明かではない。し

かし、賀茂真淵派の歌人達の頃は政治に附属させられていた彦根藩の国学が自立していく気運を見ることが出来る。

小原君雄の意見書は次のような点においても、宣長の国学の本質的な性格をよくあらわしている。宣長の学問は常にそれまでの限定された枠組みをうち破る方向を目指している。歌論については堂上家の独占と秘伝を否定し、さらには恩師真淵の古風に拘泥する姿勢をも批判して容赦なかった。また『古事記伝』は、日本紀の家といわれた吉田家、伊勢神宮の権威を背景にした伊勢神道、あるいは秘伝による修養を重視した垂加神道などの特別な学閥によらないはじめての記紀研究であった。

宣長の国学はそれまで特定の限られた場にとじこめられていた歌や古学を解放する性格をもっている。小原君雄の和学のとらえ方もこの文脈上に位置づけられるであろう。

二

第二の古風を固守するか、後世風をも容認するかという問題は賀茂真淵と宣長の思想的根本的な相違に根ざしている。

生まれつきの歌人である真淵はほとんど感覚的に万葉集のゆたかな言葉を吸収し、その精神までを我が物にすることができると信じて疑わなかった。そのひたむきなエネ

ルギーの供給源となったのは「天地の心」⁽²⁸⁾が古とかわるごとなく今もはたらいっているという確信であった。「春も漸^{のどけ}にして長閑き春となり、夏も漸にして、あつき夏となれるがごとく」、四季はおのづからおだやかにめぐっていく。このおのづからの天地の営みが真淵の思想を支えている。

「古への神皇の道」も「天地に合ひて、御代を治めませし」⁽³⁰⁾道なのであり、唐とちがって仁義礼智の徳目をことさらに挙げる必要がなかったのも「天地の心のまゝなるこそよけれ」⁽³¹⁾と考えられたからであった。

歌ももちろん「天地の心」の中に位置づけられている。真淵は次のように述べている。

（歌の）しらべの大よそは、（中略）つらぬくに、高く直き心をもてす。且その高き中にみやびあり、なほき中に雄々しき心はある也。何ぞといへば、よろづのもの、父母なる天地は、春夏秋冬をなしぬ。そが中に生まる、もの、こをわかし得るからに、うたひ出る歌の調べもしか也。（『邇飛麻那微』、平・阿部校注『近世神道論・前期国

学』岩波書店、一九七二年、三五八頁）

歌のしらべは天地が紡ぎ出す春夏秋冬の性質をわかちもっている。だからその中にはみやびなしらべもあり、また雄々しい調べもあるというのである。「天地の心」は真淵にとってあらゆるものを判断し評価する際の規準であった。

そして、その「天地の心」は今も昔もかわらない。それが真淵に復古を確信させるのである。

いでや天地の、かはらふ事なきまにまに、鳥もけものも、草も木も、いにしへのごと、ならぬしなきをおもへば、人のかぎりしもなぞや、いにしへ今と、ことなるべき。(『歌意考』、同前、三五〇頁)

真淵は「天地の心」の後ろ盾によって、今この世にありながら古の人々と同化できるという確信をつかんだ。真淵の思想に見られるゆつたりとした大らかさは「天地の心」によって支えられているという安定感と表裏一体をなすものであった。

真淵ほど文学的な才に恵まれず、むしろ現実的な生活者であり、実証的な研究を身上とする宣長はそれほど単純に万葉集に心酔することはできなかった。語法からいえば上古より中古の方がすぐれていることは明らかであったし、技巧をかたく否定する真淵の考えは現実からかけ離れた空論のように宣長には思われた。何よりも宣長にとって天地はすでに死物であったから、真淵のようにそれによって詠歌を意味づけることはできなかったのである。

天地は死物にして、心もしわざもある物にはあらぬを心もありてしわざもあるが如く思はるゝは、みな神の御心にて、神の御しわざ也、たとへば、天地は器物の

ごとく、神はその器物を用ふ人の如し、人有て用へばこそ、器物はそれぞれの用をなせ、みづからはたらきて用をなす物にはあらず、(『くず花』、『本居宣長全集』第八巻、筑摩書房、一九九〇年、一四二頁)

天地はもはや死物である。それを動かす神が人になぞらえられていることはきわめて象徴的なことである。死物である天地を器のように人が使う。宣長の世界は、それまでの天地の運動という大きな枠組みをもつ世界観とは異なる、人だけの世界なのである。宣長は、天地に繰り広げられる四季の営みによって確信を与えられ、「天地の心」のままに安んじて歌を詠んでいればよかった真淵とは異なつて、人だけの世界の中で生き、そこから何らかの確信を得なければならなかった。真淵が古と同化することができたことを単純に信じ、ひたすら古を追慕することができたのは「天地の心」の後ろ盾があつてのことであつた。もはやそれを持たない宣長の目は歌の実際の変遷に向けられていく。人々が織りなす歴史的な変遷の中で歌をとらえていくのである。こうして宣長の歌論は、大らかでのどかな、しかしひたすらな古への追慕を感じさせる真淵の歌論とは異なつて実証的な歌学研究の趣を持つことになる。

宣長は真淵ほど樂觀的に今の世に生きる者が素直な万葉ぶりの歌を詠むことができるとは思えられなかった。

古風は時代遠ければ、今の世の人、いかによくまなぶといへども、なほ今の世の人なれば、その心全く古人の情のごとくには変化しがたければ、よみ出る歌、古風とおもへども、猶や、もすれば、近き後世の意詞味のまじりやすきもの也（『宇比山踏』、『本居宣長全集』第一

巻、筑摩書房、一九八九年、二四頁）

しかも、歌の変遷を概観すれば、歌詞をあやなし技巧的になるのは当然の道理と思われた。このようにして宣長は後世風を積極的に容認していくのである。宣長の歌風は、その詳細な歌の変遷の研究の結果、あやなしてよむという雅の追求にたどりつく。

こうした変化は彦根の歌人達によつて敏感にとらえられていた。小原君雄は大らかな万葉ぶりの歌を詠む生粋の県居門の歌人海量と小林義兄を批判して次のように述べている。

海量、義兄は、いと古き姿をのみ好き、物して、其の古き中にもおふり落ちたる、ひなひたる、けちめある事まではいはず、ひた趣なりつるを、泰足のみ尚此ことをも能く弁へて、古風をも諸定かに路分け、近き代のふりをも委しくさとし明めて、ふりぶり漫りならさりし（『凝烟舎詠草』序、慶應義塾大学図書館蔵）

小原君雄は、県居門の海量や小林義兄がただ何の見境もなく「ひた趣」に古風のみ追うことを批判し、両風をそれ

ぞれ「定かに路分け」、「委しくさとし明めて」それぞれ「漫りならさりし」さまに詠み分ける鈴門の村田泰足を高く評価している。鈴門の歌学研究が県居門より数段すぐれていることを誇る文章なのであるが、ここから読みとるべきことはそれだけではあるまい。

県居門の人々が「ひた趣」に古風を守るさまは、県居門において詠歌が「天地の心」によつて意味づけられた切実な営みであったことを物語っている。一方、鈴門の村田泰足の、詳しい歌学研究に基づいて両風を詠み分け漫りならぬさまに詠みおさめる姿勢は、歌が内発的なものではなくなつて研究の対象となり、表面的な技巧に終始するさまをあらわしている。

県居門の海量にも、評価は逆であるが同じ内容の指摘がある。

（宣長の）あめるふみ、よめる歌をみるに、ことのひろく、ことわりのこまやかなることはそのかぎりをもしられど、真淵翁らのあらはせるふみどもの、心ばへのなほにして大らかに、ことばのゆたけく、しらべのを、しきにくらべては、雲ぬにかけるあしたづと、澤べにあさるあぢがもなどのたがひなせり。よくおもふに、年月にあらはせるふみどもを、よ人のめではやせるは、ことのくはしくつばらなるに心のかたむくにし

て、まことにはそのうつはのちいさくして、大らかなるひじりの道のこゝろにいらざるなるべし。(海量の寛政九年、十二月二十六日の日記。森銃三『海量法師』、森銃三

著作集』第二巻、中央公論社、一九七一年、一六八頁—一六九頁

宣長の著作、歌は「ことのひろく、ことわりのこまやかなること」かぎりもないけれども、真淵の著作の品格の高さとは雲泥の差があるというのである。小原君雄と同じように海量も鈴門の学問の本質を見抜いている。宣長の学問は広く文献を渉獵し、実証的に事実を検証していく。天地自然の営みを根拠とすることができなくなり、人為によってすべてを説明していかなければならなくなったからである。こうした宣長の学問は海量にはいかにも狭量に、理屈めいて見えたのである。

宣長によって国学は非常な進歩をみた。古典研究や国語学における実証的な研究の水準の高さ、あるいは民俗学的な分野をも包容する視野の広さ。いずれも真淵のなし得ないところであった。詠歌の意味や変遷についても宣長の研究は「ことのくはしくつばらなる」という海量の評価どおりである。しかし、そうした学術的な進歩の反面、鈴門の詠歌は県居門の人々の「ひた趣」なさまを失い、人為の技巧に傾斜していく。小原君雄と海量の文章はそれをよく示しているのである。

第三章 長野義言の歌論

長野義言の出自については伊勢飯高郡の出身であるということ以外詳しいことはわかっていない。諸方遊学を経て二十八歳(天保十三年(一八四二年))の時から伊吹山の麓に高尚館という私塾をかまえて国学を講じた。門人は『授業門人姓名録』によれば二六〇名を超え、部屋住時代の井伊直弼が義言を師と仰いだことはよく知られている。義言自身は鈴屋の門人ではなかったが、師事した堀内広城は本居春庭門下の歌人であり、義言も養子義文を本居内遠のもとで学ばせている^③。

このように鈴門と関係の深い長野義言が宣長の国学の流れをひく国学者として位置づけられるのは当然のことであろうが、彼の思想内容には宣長とはかなり異質な部分がある。真淵や宣長は常に神代を規範としそれにかえることをめざしていたのに対して、義言の場合古にかえるという意識は希薄で、むしろ眼前の問題を乗り越える力を国学に期待しているのである。

宣長は常に『古事記』、『日本書紀』に記された神々の事

跡を念頭においていた。古の神々や天皇の事跡が規範としてあり、それが人のふむべき道であると考えられていた。しかし、長野義言の場合は、古にかえるというよりも、むしろ、今自然にみずからのうちに備わっている「神の道」を成就させることが思われている。「神の道」について長野義言は次のように述べている。

天下国家も治めんと思ひ給ひて、神の道のまゝ、におこ
なひ給へば、自然に治る処あり。是いはゆる神の道也。
人一身比のうへにても、いかなる事をもせんと思ひて
つとむるほどに、自然^{おのずから}其妙にいたる。是人力のみな
らず、いはゆる神の道のまゝにして、天地の間の道理^{ことわり}
也。（『沢能根世利』、芳賀・松本校注『国学運動の思想』岩波
書店、一九七四年、四一一頁）

「神の道」に従うことによつて自らその妙に至ることが
できる。人力だけではなく、神の道によつてことが成就す
る。それが「天地の間の道理」であると長野義言はいう。
「天地の道理」とは「神の道」のままに行えば、自然に其
の妙に至ることをいう。人のなすべきこととはこの「神の
道」によることである。

見る眼、きく耳、いふ口、とる手、ゆく足までに、□
産霊の神の御恩頼^{みたまのかたみ}ぞとしりたらんうへは、わざも行ひ
も亦、此神の道にぞよるべき事なり。その神の道によ

らんと思はんには、自然^{おのづから}備有^{そなはれもつ}道によりて、他にもと
むる事なく、私意をはなれ得ば、いと明らかに弁へら
れなん。（中略）何事によらずつとむべき元は、各其身
に具しながら、得つとめぬは自然をうしなふ不肖也。

（同右）

産霊の神の御恩頼によつてこの世に在る以上、何にせよ
「神の道」によるべきである。「神の道」によるとは「自然
備有道」によることであり、それは私意（ここではさかしら
な、自然に反する心を意味する）を離れば明らかに解ること
である。「自然備有道」をそなえられていながら、それに
従わないのは、「自然をうしなふ不肖」である。

一見して宣長の真心論を思わせるが根本的な部分が異な
っている。宣長の真心論では、神によつて与えられたまま
の心（真心）がかくあるべき規範であつて、それにかえる
べきことが強く訴えかけられている。しかし、長野義言は
同じ内容を述べながら、強調点はみずからの内にある「自
然備有道」を認識し、それをそのまま発現させることに置
かれていたのである。それによつて人力を超えた妙に至る
ことができる。それが長野義言のねらいであつた。義言に
とつて国学とは、宣長のように古を規範として学ぶことで
はなく、人力を超えた力を提供してくれる源なのである。

二

この相違は両者の歌論にはつきりとあらわれている。宣長が歌は情を述べるものであると認めながらも、詞を選び整えて雅に詠むことを詠歌の条件としたのは、宣長にとって歌がかくあるべき心ばへを伝えるものであったからである。

宣長が理想としたのは、漢意に汚染される以前の、ものやことのあはれを深く感じる心であった。それこそが、神代のころろばへであり、神に与えられたままの心であると考えられた。それを今に伝えているのが歌であり、歌文を学び歌を詠むことによって、あはれ深い心ばへを獲得することができると。宣長はそう考えていた。宣長にとって歌は神の示す規範の具体的なあらわれであった。

長野義言の歌論にはそうした規範的な意識はない。ただ情をそのまま表現することだけが説かれている。

か、れば上手といはれてよく詠む人も、至る所は自然になる情のまゝに立ち帰るやうにと心すべき事にて、今の世の人のごと情を本とせざる歌はならず。（『歌の大意』、佐々木・芳賀校註『和歌作法集』博文館、一九一五年、九四頁）

自然の情の切なるは上手も及び難かるべし。（同右）

「上手」といわれるような巧みを尽くした歌は評価されない。詞はあくまでも「末」であり、「本」である情^③を失わないことが第一と考えられている。

このように、長野義言の歌論では宣長において示されていた神代の心ばえにかえるという道筋が見えなくなり、「自然備有」情をそのままあらわすことが最も重要であると考えられている。「自然備有道」つまり「神の道」にそうることによって人力を超えた妙に至ることができるからである。

義言は情のない草木さえ歌に感ずることがあることに感嘆して「実に天地の道理を尽くす事、歌ならずは有るべからず^④」と述べている。「天地の道理を尽くす」とは神の道のままにおこなってその自然の妙が充分に發揮されることを意味する。長野義言は宣長のように歌に規範を見いだすのではなく、歌のもつ人力を超えた力に依ることを考えている。眼前の現実を乗り越えるための力を国学に求めているのである。

藩校改革に対する長野義言の姿勢がその一例となるであろう。義言が藩校弘道館（天保元年（一八三〇年）稽古館は弘道館と改称された）の和学方となった時、直中の頃の清新な氣風は薄れ、当時の藩主井伊直弼をして「札儀廉恥之心薄く柔弱二流レ近来以之外ナル風俗二相成候^⑤」と嘆かせるほど

の惨状であった。『諸学校紀聞』にも彦根藩の藩校について「其制疎略にして」、「教も行れ難く衰弊の様子成と云³⁸」と記されている。

長野義言はこうした藩校の状態を国学を中心にすすめることよって克服していこうとした。田中千和氏によれば、長野義言の「弘道館御改革趣意書」は「藩学の機構の紊乱、藩儒の無気力、子弟の非行をきびしく指摘、国学を軸とする藩学風の転換刷新論」であったという³⁹。

長野義言の藩政改革のための上申書である『沢能根世利』の「古の祭事は祭祠を先にす」の章には「常に天地の道理をよくをさめて、神をまつり給ふばかりの大きな恵みは、又他に求め給ふべくもあらずかし⁴⁰」とある。神をまつることによって人力を超えた恵みを与えられることが強く求められている。

安政二年（一八五五年）、長野義言が宣長の霊を勧請してまつたのも人力を超えた恵みを求めていることであろう。その祭式の心を尽くした次第⁴¹は義言が宣長の霊の力を頼むこといかに厚かったかを示している。

おわりに

以上、彦根藩における国学の受容と変化について県居門、

鈴門、長野義言の歌論を通して考察してきた。県居門の歌人達のもとでは治国の手段であった詠歌は、鈴屋の門人達に受け継がれることによって、宣長の国学の特色である広がりを見せ、政治や藩校といった機構から解き放たれていく気運を見せた。その一方で、鈴門の国学は実証的な性格の故に、彦根の県居門人から品格がないと批判されていたことはおもしろい事実である。そして、幕末、長野義言の時代になると歌が規範性を失い、むしろ歌の秘める人力を超えたはたらきに眼がむけられるようになる。

こうした変化の中に国学が自立していく過程が読みとれることが彦根藩の国学の特色の一つであろう。県居門の歌を政教の具とするとならば儒教的であり、実際にも徂徠学と共存するような形で初期の歌壇が形成されていた。賀茂真淵が歌論の根拠とした「天地の心」にも儒学の名残が感じられる。

それが、鈴門小原君雄の時代になると国学はより基本的な素養であるという認識のもと、徂徠学を中心とする藩校から自立していく動きをみせる。国学に対する認識が深められ儒学との相違が意識されるようになって、それから決別せざるを得なくなったのである。

さらに長野義言の時代になると国学を軸とする藩校や藩政の改革が提言され、国学独自のはたらきが期待されるよ

うになる。幕末に至ると彦根の国学は新しい重みを帯びてくるのである。

また、彦根藩における国学の推移は彦根藩だけに限られた変化ではなかったことも指摘しておかなければならない。それは、より広い動きや大きな思想の流れを反映しているのである。

たとえば、小原君雄が和学を藩校から切り離し私塾で教えることを上申したのは文政八年（一八二五年）のことであるが、文化文政年間には、私塾の数が画期的な伸びを見せた時期である。寺子屋で教えられる以上の学問を求めて私塾へ通う庶民が増え、また藩校より広い視野をもって人材を養成する私塾が力を伸ばしつつあった。小原君雄の提案も近世末期のこうしたうごきの一つなのである。

また、鈴門の小原君雄や村田泰足は技巧的な歌を容認し実証的な歌学を好んだが、その後、それを批判するように長野義言が有りのままを詠み、それによって人力を超えた「神の道」によることを主張した。

これは、宣長に靈性が欠けていることを批判して、ひたすら言霊に依り頼んで超越的な力の発現を願った富士谷御杖や、幽冥界との交流を生き生きと描き、そこから力を受けることを思つて生きた平田篤胤の系譜につながる思想なのである。

注

(1) 岸野俊彦『幕藩制社会における国学』（校倉書房、一九九八年）。

(2) 西岡和彦「近世出雲大社の思想的的研究―特に垂加神道受容の要因並びに国学との相克について―」（『國學院大學日本文化研究所紀要』八十、一九九七年）。

(3) 中村一基『本居派国学の展開』（雄山閣、一九九三年）。

(4) たとえば宣長の天明七年十一月の栗田土満宛書簡（『本居宣長全集』第十七卷、筑摩書房、一九九〇年、一〇二頁）あるいは寛政六年三月の川村政雄宛書簡（同右、二二八頁）参照。

(5) 『鈴屋集 鈴屋文集六』（『本居宣長全集』第十五卷、筑摩書房、一九九〇年）、参照。

(6) 『追悼歌文集』（『本居宣長全集』別巻三、筑摩書房、一九九三年）、参照。

(7) 笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究』下（吉川弘文館、一九七〇年）、七八七頁―七八八頁。

(8) 築瀬一雄『近世和歌研究』（加藤中道館、一九七八年）、六五五頁参照。以下それぞれの歌集の編者と出版年を中村直勝監修『彦根市史』中冊（彦根市役所、一九六二年）の五九一頁―五九二頁、及び笠井助治『近世藩校に於ける出版書の研究』（吉川弘文館、一九六二年）、三三九頁から引用しておく。

沢村琴所撰『彦陽和歌集』（享保十三年（一七二八年））。小原君雄撰『彦根歌集』（寛政八年（一七九六年））。

小原君雄撰『彦根夫梨』（天保年中）。

村田泰足撰『凝烟舎詠草』（天保二年（一八三二年）か）。

(9) 中川泉三編『彦根市史稿（58文筆編Ⅵ）』（彦根市立図書館蔵）の『彦陽和歌集』の項には歌の作者の略歴が記されている。それによると、作者四十二名のうち町人、村人、浪士は合計五名。僧、医者をこれに合わせると十二名にのぼる。

(10) 笠井助治『近世藩校に於ける出版書の研究』（吉川弘文館、一九六二年、三三九頁）。

(11) 中川泉三編『彦根市史稿（58文筆編Ⅵ）』（彦根市立図書館蔵）。

(12) 田中千和「縣門と彦根の国学」（『日本歴史』第六十四号、一九五二年）、同「鈴門と彦根の国学」（『日本歴史』第七十九号、一九五四年）、同「国学者長野義言について」（『日本歴史』第一一四号、一九五七年）。

(13) 南啓治「彦根藩と国学」（『帝京大学文学部紀要 教育学・哲学・歴史』三号（帝京大学文学部、一九七九年）、同『近世国学とその周辺』（三弥井書店、一九九二年）。

(14) 笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究』下（吉川弘文館、一九七〇年）、七九〇頁以下。

(15) 安政四年藩主井伊直弼が藩学を徂徠学から朱子学へ転ずる旨諭達したが、それ以後も教授にあたる者は徂徠学派が多くを占めた（笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究』下、吉川弘文館、一九七〇年、七七八頁）。

(16) 大菅中養父『国歌八論斥非』（『本居宣長全集』第二巻、筑摩書房、一九八九年）、四九九頁。

(17) 海量『東遊日次記』（『日本名著全集 和文和歌集』（日本名著全集刊行會、一九二七年）、五〇七頁）。

(18) 賀茂真淵の歌の意味づけは年代によって変化している。治国の手段としての歌の役割を重くみている時期もあり、また「再奉答金吾君」のように歌の教誡性を否定し情の純粹な発露であるとする論考もある。ここに引いた「国意考」は明和二年（一七六五年）真淵六十九歳の時の著作であるが、儒教的な歌の意味づけが見られ、太田青丘氏はそこに真淵の儒教的素養の根強さを見ている（太田青丘『太田青丘著作選集 第一巻 日本歌学と中国詩学』桜風社、一九八八年、二五一頁）。

(19) 海量『東遊日次記』（『日本名著全集 和文和歌集』日本名著全集刊行會、一九二七年）、五〇七頁。

(20) 同右、五〇七頁—五〇八頁。

(21) 賀茂真淵『遡飛麻那微』（平・阿部校注『近世神道論・前期国学』岩波書店、一九七二年、三六三頁）。

(22) 海量『東遊日次記』（『日本名著全集 和文和歌集』日本名著全集刊行會、一九二七年）、五〇九頁。

(23) 中村直勝監修『彦根市史』中冊（彦根市役所、一九六二年）、五九一頁—五九二頁。

(24) 宣長と海量の交流については森銃三「海量法師」（『森銃三著作集』第二巻、中央公論社、一九七一年）が詳しい。また、海量の歌集『ひとよはな』には宣長が序を寄せている（『日本名著全集 和文和歌集』日本名著全集刊行會、一九二七年、四五五頁—四六二頁）。

(25) 田中千和「鈴門と彦根の国学」（『日本歴史』第七十九

号、一九五四年)、一四頁。

(26) このうち小原君雄の入門は藩命によるとする見方もある(同右、二五頁)。

(27) 本居宣長「あしわけをぶね」(『本居宣長全集』第二巻、筑摩書房、一九八九年)、三頁。

(28) 賀茂真淵『国意考』(平・阿部校注『近世神道論・前期国学』岩波書店、一九七二年)、三八四頁など。

(29) 同右、三八三頁。

(30) 賀茂真淵『邇飛麻那微』(平・阿部校注『近世神道論・前期国学』岩波書店、一九七二年)、三六三頁。

(31) 賀茂真淵『国意考』(平・阿部校注『近世神道論・前期国学』岩波書店、一九七二年)、三八四頁。

(32) 『宇比山踏』(『本居宣長全集』第一巻、筑摩書房、一九八九年)、一二二頁、一三三頁。

(33) 中川泉三編『彦根市史稿(59)』(彦根市立図書館蔵)。

(34) こうしたことで以外にも鈴門と深いつながりが見られることは田中千和「国学者長野義言について」(『日本歴史』第一一四号、一九五七年)参照。

(35) 『歌の大意』(佐々木・芳賀校註『和歌作法集』博文館、一九一五年)、八五頁。

(36) 同右、一〇六頁。

(37) 文部省編『日本教育史資料卷三』(臨川書店、一九六九年)、三九八頁。

(38) 文部省編『日本教育史資料卷六』(臨川書店、一九七〇年)、一七九頁。

(39) 田中千和「国学者長野義言について」(『日本歴史』第

一一四号、一九五七年)三七頁。以後、各氏が長野義言に「弘道館御改革趣意書」があると言及しているが、所在がわからず未見である。

(40) 『沢能根世利』(芳賀・松本校注『国学運動の思想』岩波書店、一九七四年)、四一四頁。

(41) 『花能幣帛』(彦根城博物館蔵)は安政二年二月五日、長野義言が宣長——若秋津彦美豆櫻根大人——の霊を櫻根社に鎮祭するために執り行った歌会の次第である。正面に神影を掲げ、出席者が「春の神祇」という題で詠んだ歌を宣長の霊に捧げる古式ゆかしい祭祀であった。その中の祝詞には「今如此奉る幣帛を足幣帛と神隨も所聞^{きこ}見て、今も往前も某等が学の業を弥奨めに奨め給ひ弥助に助給ひて漏落む事をば神直日大直日に見直しまして古学道に功おへしめ給へ」(便宜上、表記を改めた)という祈りがある。

(42) 石川松太郎『藩校と寺子屋』(教育社、一九七八年)、一三三頁。

〔付記〕史料閲覧に関して、彦根市立図書館、彦根城博物館の御高配に与った。記して謝意を表したい。

(元お茶の水女子大学研究生)